

「オツベルと象」における問いの検討

—読みの交流の分析を通して—

大 島 彩弥香*・佐 藤 多佳子**

(令和5年8月30日受付；令和5年11月9日受理)

要 旨

テキストを根拠として読者がオリジナルな読みを創造することは、文学作品の解釈において、作品世界を読者の手によってより豊かなものに創造していく行為である。「オツベルと象」はテキストの不確定性の度合いが高い、「空所」の多い作品であり、読者の多様な読みが可能な作品である。本研究は、「オツベルと象」を教材として読みの交流を行うとき、どのような問いを設定すれば、読者が作品の本質に迫ることができるかを検討することを目的とする。本稿では、大学院生を対象とし、設定した問いに対して読みの交流が成立するかを分析・検討した。

白象の「さびしさ」に着目した問いや、語り手である「牛飼ひ」の意図や存在の意味について考えさせる問いにおいて読みの交流が成立し、作品の本質に迫る読みを引き出すことがわかった。

KEY WORDS

読みの交流 問い 空所 語り手 オツベルと象

1 はじめに

「オツベルと象」は『月曜』1月創刊号（大正15年1月1日発行）において発表された宮沢賢治の作品である。「……ある牛飼ひがものがたる」という前置きから始まることから、ある牛飼ひが語り手となって、第一日曜、第二日曜、第五日曜の3日間にわたって、オツベルと白象の身に起こった出来事を語るという額縁的な構造をもつ物語作品である。

この作品は、語り手である牛飼いと、オツベルとの関係性が明確に語られない点、第二日曜の語りの次が、第五日曜の語りとなるという、語りの期間に時間的な空白がある点、「おや、[一字不明]、川へはいつちやいけないつたら。」⁽¹⁾という、対象が書かれない呼びかけで終わる点などから、イーザー（2022：312）⁽²⁾の言うところの、テキストの不確定性の度合いが高い、「空所」の多い作品であるといえる。イーザーが「読者の想像力を必要とする作業は、空所をその手掛かりとしている。」（2022：313）⁽²⁾と述べているように、空所に着目した読みは、読者による多様な解釈を生むことに繋がる。さらに、解釈について、イーザーは次のように述べている（2022：36）⁽²⁾。

この語の意味は、このドラマの意味は、この小説の意味はといった旧来の問いは、虚構テキストを読むと、読者にはなにかが生じるか、という問いにおき換えなければならない。このように考え方を変えると、解釈の課題も変わる。すなわち、解釈はテキストの意味の解明〔限定〕にあるのではなく、テキストが内包する意味の可能性を明らかにするのでなければならない。

テキストを根拠として読者がオリジナルな読みを創造することは、文学作品の解釈において、作品世界を読者の手によってより豊かなものに創造していく行為であると考えられる。

西郷竹彦（1998：193）⁽³⁾は、文学作品の題名について、「題名は、作品の主題とか思想、象徴、あるいは題材や主人公などを、何らかの形で表しているものです。」と述べている。

「オツベルと象」の作品の本質は、オツベルと白象の関係性にあると考える。純真無垢な存在としての白象と、金もうけのために白象を利用するオツベルとの相関関係に着目して読みを深めることで、読者が作品の本質に迫ることができるだろう。

2 問題の所在

「オツベルと象」の教材化について、鎌田均（2012：146-147）⁽⁴⁾は、次のように述べている。

オツベルと白象ほど正反対な人間像が、それでも互いの立場を認め合って共生できる場、その可能性を共有しながらもなし得なかったことの原因、それこそが読みの向かうべきところではないか。それは同時に、読みの中でオツベルと白象の互いの「了解不能性」が読者に見えてくるところに教材価値があるのではないか、ということでもある。

鎌田は、オツベルと白象の相関を読むこと、オツベルと白象の心情に寄り添う読みの展開に教材的価値をみている。また、中野登志美（2012：158-159）⁽⁵⁾は結末の一行「おや、[一字不明]、川へはいつちやいけないつたら。」の発話の主体を「牛飼ひ」、牛飼ひの話聞いている「子ども」の二通りの解釈が可能であることに二重性を見出し、「読みの多様性が学習者の批評力を育てることに繋がっていく」として「オツベルと象」を教材的価値の高い作品としている。

「オツベルと象」を教材として読みの交流を行うとき、どのような問いを設定すれば、読者が作品の本質に迫ることができるかを検討することを本稿の目的とする。

3 問いの設定

「オツベルと象」について3つの問いを作成した。

問い①：オツベルが白象に「つらく」したのはなぜだと思いますか。

問い②：最後に白象はどうして「さびしくわらつ」たのだと思いますか。

問い③：「牛飼ひがものがたる」設定はどんな効果を生んでいますか。

3つの問いを設定するにあたって重視したことの第一は空所への着目である。第二は要点駆動の読みの成立可否である。1つ目の問いはオツベルの心情を読む問いであるため、物語内容駆動の読みに留まると思われる。ただし、2つ目以降の要点駆動の読みが期待される問いに対して、オツベルの心情を理解するための問いは必要であると判断し、1つ目の問いを設けた。

2つ目の問い「最後に白象はどうして『さびしくわらつ』たのだと思いますか。」の「さびしく」について小笠裕二（2011：36-37）⁽⁶⁾は以下のように論じている。

白象には否定されるべき確固たる自身の生き方はなかった。白象はオツベルの死によってはじめて何かに気づいたのである。その気づきとは、生き物は殺生を避けて生きられないという〈修羅〉の認識ではなかったか。そしてその認識は、自身が救われようとした結果もたらされたものであることに気づいたのではないか。白象のさびしさは、〈修羅〉の現実を知ったさびしさであった。さらにいえば、〈修羅〉の現実と今後無縁ではいられなくなったさびしさ、無垢の世界が失われたさびしさ、これからの厳しい道をひとりで歩いていかねばならないさびしさであった。

また、須貝千里（2001：35）⁽⁷⁾は白象が仲間の象に書いた手紙の「助けてくれ」を受けて議長の象が「オツベルをやっつけよう」と言ったことに対してのズレを「〈『ことば』は伝わらない〉問題」と指摘し、「そのことによって導き出された事態が、助けられたあとの『ああ、ありがたう。ほんとにほくは助かつたよ。』という『ことば』を『白象はさびしくわらつて』言わざるをえないということの要因となっている。」と述べる。他にも鎌田（2012：145-147）⁽⁴⁾、中野（2012：155-156）⁽⁵⁾も白象の「さびしさ」に言及している。白象の「さびしさ」はこの作品の核となる問題であり、「さびしくわらつて」に着目した問いは作品の本質に迫る問いとなりうると思う。

3つ目の問い「『牛飼ひがものがたる』設定はどんな効果を生んでいますか。」については、語り手である「牛飼ひ」について、高橋敏夫（2001：23）⁽⁷⁾は、器機の導入されていく農村と白象とその仲間たちが住む森の奥の両方を知っている語り手の必要性を論じ、山元隆春（1989：53）⁽⁸⁾は、「オツベルと象」の語りの構造について、「牛飼ひ」

によって語りかけられている「暗黙の聞き手」と実際の読者が完全に重なり合わないことから「奇妙な読後感」が生じると述べる。オツベルと白象のストーリーには直接的に関係しない、語り手としての「牛飼ひ」の存在そのものが「空所」と考え、ここに着目した問いにおいては、作者の意図を考えることに通じる要点駆動の読みが発生すると考えた。

松本修 (2006: 91)⁽⁹⁾ は、読みの交流を可能にするための話し合いの課題について、「話し合い活動における課題は、テキスト全体にかかわるようなマクロなものよりもテキストの細部に関わるミクロなものの方が有効である。」と述べている。具体的なテキストを指定することで、テキストの細部を根拠として言葉を吟味する読みが発生する。松本・桃原 (2020: 4)⁽¹⁰⁾ は、「読みの交流を促す〈問い〉の要件」として以下の5つを挙げている。

- a 表層への着目
テキストの表層的特徴に着目する〈問い〉であること
- b 部分テキストへの着目
部分テキストが指定されていることによって、読みのリソースの共有がなされていること
- c 一貫性方略の共有
部分テキストが他の部分テキストや全体構造との関係の中で説明されるという解釈の一貫性方略（結束性方略）が共有されていること
- d 読みの多様性の保障
読み手によって解釈が異なるという読みの多様性に関わっていること
- e テキスト本質への着目
想定される作者との対話を可能にするようなテキストの勘所にかかわるものであること

3つの問いを、問いの要件に当てはめて考えると以下ようになる。

問い①：オツベルが白象に「つらく」したのはなぜだと思いますか。

- a 表層への着目：前の箇所「オツベルはすこしひどくし過ぎた。」「しかたがだんだんひどくなつた」とあり、それに続く叙述として「オツベルは、ことごと象につらくした。」とある。繰り返しの表現からオツベルが象を使役する度合いを強めたことが強調される表現であり、テキストの表層的な特徴である。
- b 部分テキストへの着目：部分テキストを指定している。
- c 一貫性方略の共有：オツベルがこれまで白象に課してきた仕事との対比、オツベルにとっての白象の価値や存在の意味と関連させて考えることができる。
- d 読みの多様性の保障：「苦しいです」と言う白象の言葉を聞いたのちに、白象に「つらく」するオツベルの行為について、オツベルの意図や心情を多様に説明する読みが期待される。
- e テキスト本質への着目：この問いについて読み深めることは、オツベルにとって白象はどのような存在であるのか、オツベルと白象との関係性が何を表すかということを読者に考えさせることにつながる。

問い②：最後に白象はどうして「さびしくわらつ」たのだと思いますか。

- a 表層への着目：物語の最後、仲間に助けられた白象の様子を語っている表現であり、テキストの表層的な特徴である。
- b 部分テキストへの着目：部分テキストを指定している。
- c 一貫性方略の共有：白象がオツベルの小屋に来た理由、白象にとってのオツベルという存在の意味、作品における白象の意味と関連させて考えることができる。
- d 読みの多様性の保障：素直で従順な態度をもつものとして描かれている白象がオツベルが「くしゃくしゃに潰れ」た後に「笑う」という行為は読者に疑問を起す表現であり、白象の心情について多様な読みが期待される。
- e テキスト本質への着目：この問いについて読み深めることは、物語における白象の意味について考えることにつながり、作品の本質に迫る問いである。

問い③：「牛飼ひがものがたる」設定はどんな効果を生んでいますか。

- a 表層への着目：物語冒頭の表現であり、「オツベルと象」というタイトルの後に出てくる「牛飼ひ」という言葉はだれもが着目する、表層的な特徴である。
- b 部分テキストへの着目：部分テキストを指定している。
- c 一貫性方略の共有：「牛飼ひ」がこの物語を語る理由、作者が物語を「牛飼ひ」に語らせる理由について、読みを深めることにつながる問いである。
- d 読みの多様性の保障：「牛飼ひ」のオツベルや白象に対する寄り添いの度合いや、最後の一文「おや、[一字不明]、川へはいつちやいけないつたら。」を誰に対してのどのような意味をもつ呼びかけと読むかによってさまざまな読みが可能となる。
- e テキスト本質への着目：「牛飼ひ」の語りについて読みを深めることは、この作品の構造や作者の意図を考えることにつながる。

4 読みの交流

4.1 実践の概要と分析方法

4.1.1 期日 2023年6月22日(木)

4.1.2 対象 大学院生8人 4×2グループ(ストレート6人 現職2人 ※8人中、国語科を専門とするものは4人)

4.1.3 分析方法

松本修(2015:15-16)⁽¹⁾は、読みの交流が成立したかどうかを分析するための方法として「質的三層分析」を提起している。「質的三層分析」について松本は次のように説明している。

これは、発話プロトコルをその本来の文脈(textual context, co-text)の範囲内で、しかし、形式・機能・意味の三つの側面に着目してそれぞれの角度から分析し、それらの相互の整合性を見ることで、解釈の間主観性を保とうとする方法的試みである。

この「質的三層分析」においては、学習者同士の認知的な変容やメタ認知的な変容にかかる発話内容の検討を重視し、その発生をもって読みの交流の成立とする。「オツベルと象」の読みの交流を、この質的三層分析の方法を使って分析する。以下には要点駆動の読みが引き起こされると考えられる、問い②と問い③についてのプロトコル分析を詳細記述する。発話プロトコルの書式は注に示す。

4.2 問い②に対する発話プロトコルの分析

【Aグループの発話】

39ST 最後にぞうはどうしてさびしくわらったのか(4)なにかありますか。

40AR なんか苦しいはず()私詳しく読んでないんで見間違いかもしれない()オツベルになんかちょっと情ってゆうか気持ちが入ったのかなみたいな、ちょっと思ったのが、オツベルと百姓との間のなんかかべみたいなの、隔たりが、あった、3ページの一番最後、なんかへいの中にはオツベルはたった1人で叫んでいた()なんか1人だけこう()なんかみんなはその降参する笑()印やったりするじゃない()1人だけなんかこう、オツベルが叫んでるみたいなのがある、服装ってなんか一番最初の()ちょっとその白い、()真っ白()多分他の象って灰色()仲間がなんか、いやなんか違うと思うんですけどなんかそこも関係あるのかなってちょっと思っちゃった(3)なんか最初そのちょっと、オツベル感情移入したのかなって

思ったんですけど、じゃあなんで感情移入したのか、なんかぎゅっとされてるのに、普通だったら恨むじゃないですか、なんで感情移入したのかなって思ったらちょっと私はそれくらいしか思いつかなくて、なんかはい、なんかそれくらいしか思いつかなくて、//そもそもそういうことじゃないかもしれない()。

41ST //ありがとうございます。

42AR 行動が似てるっていうか。

43TD 象ってまあ群れを形成する動物だから、1人で行動するってのはなかなか考えづらいわけで、その1人でこの：オツベルの家にこうきたわけだからもしかしたらちょっとこう。

44AR そうですねなんか。

45TD ん：まあつまはずき、どうだろう助けに来てくれてるわけだから//違うかもしれないけど。

46AR //はいそうそうなんです、なんか仲間を呼んでるし：。

47TD う：んちょっとこの白い象は感じてるものがあつたのかもしれない＝

48AR =なんか、今までは、そのオツベルと百姓たちと象、白象って感じだったんですけどなんかその白象に仲間たちがぴたっとよって白象とその仲間、百姓とオツベルみたいなちょっと似ているような、そこをちょっとなんか (2) なんか別の見方、ってゆうか (2) 別のものもある。

49TD うんうん。

50ST (3) 自分はシンプルにそこまで考えられてなくて、元々、象が人に：友達みたいに、接して、自分もまたそういうふうに接してもらってると思ってるつもりだったと思ってたけど裏切られて悲しい、ってゆう感情と、最終的に仲間が助けに来てくれたことと、命が助かったってゆう嬉しいってゆう感情が、混在して、寂しくわたらったってゆう表現になったのかな：：としました。

(中略)

●形式的な特徴の分析

司会者や発言の順が定まっておらず、自由な発言がなされており、インフォーマルな会話である。発話の重なりや連続発話があり自由闊達な雰囲気が進められている。

●会話上の機能の分析

39ST 「なにかありますか。」、40ARの直後、41ST 「ありがとうございます。」など、STは、他者の発話を促し、交流を促進する役割を担っている。

●意味的な内容の分析

40ARは「オツベルになんかちょっと情ってゆうか気持ちが入った」理由として「オツベルと百姓との間のなんかかべみたいなの、隔たり」というオツベルと百姓たちとの心理的距離と「真っ白 () 多分他の象って灰色」という白象と仲間の象との色の違いに基づく心理的距離との類似性を指摘している。テキストには「灰いろ」とあるが、それを指摘できなかったために「いやなんか違うと思うんですけど」「そもそもそういうことじゃないかも」などと、意見を強く主張しない態度が表出したと思われる。それに対して、45TD 「つまはずき (つまはじき)」という言葉でARが読み取った白象の孤立を表している。これは、ARの読みの方略をTDが理解しているもの、メタ認知の発生と捉えることができる。

【Bグループの発話】

(中略)

104IT 寂しく笑った、僕じゃいいですか。

105KT はい。

106IT 自分が自分の意志でぞうです、白象、自分が自分の意志で小屋に来た、序盤はにげ：：れたのに、それもせず、え：：とまあでも最終的にこうなかま：：を呼んで、命を奪ってしまったことへの、こ：：う、自分は助けられただけど素直に喜べないような感情みたいな、その寂しさなのかなって思ったんですけど。

107YM オツベルに対する？＝

108IT＝オツベルに対する、もっと深いんじゃないかなって今は、思ってます、でももうちょっと言葉にできてなくて＝

109KT＝うん＝

110IT＝もう少し読んだ中で出てくるかもしれないです、

は：：い。

111KT (7) なるほど (4) 私最後までまだ行ってないんだよね、//すいません。

112IN //私もなんかそんな感じで//本当は。

113KT //う：：ん。

114IN 最初、オツベルと仲良くしたかったと思うんですけど：：でもやっぱり、まあオツベルが死んじゃったってゆう結果で、でも、そうじゃなきゃ自分が死んでたかもしれないってゆう、考えもあってなんか矛盾抱えてるってゆうか、なんだろう、そうですね＝

115KT＝う：：ん＝

116IN＝ITが今ゆったみたいな感じ。

(中略)

●形式的な特徴の分析

司会者や発言の順は定まっておらず、104IT 「僕じゃいいですか」など話したい人から話す自由な雰囲気である。また、発話の重なりやつながりが見られ、遠慮せずに思いついたことを話す、インフォーマルな会話である。

●会話上の機能の分析

107YMが106ITに聞き返しをして、会話を深めようとする意図が見られる。

●意味的な内容の分析

白象がオツベルのところに来てきたことを106IT 「自分が自分の意志で小屋に来た」のにオツベルの「命を奪ってしまった」とし、それを108IT 「言葉にできてなくて」としている。これに対して、114INは「オツベルと仲良くしたかった」のに「オツベルが死んじゃった」として、この現象を「矛盾」という言葉で表現している。116INに「ITが今ゆったみたいな感じ」とあることから、INはITの読みの方略を理解し、自分の考えとの類似性を見出して

いる。また、物語の最初と最後の場面での白象の心情を比較し、その変化を「矛盾」という言葉で抽象化したことから、INにメタ認知的読みが発生したと考えられる。

4.3 問い③に対する発話プロトコルの分析

【Aグループの発話】（※ISは問い②の後半から参加）

75ST なにか意見ある人いますか？牛飼いが語ってることで。

76AR 一番最後の、これって意味わかりますか＝

77IS＝最後？

78AR 一番最後の一文＝

79TD＝語りからもう出たってことじゃないそこで＝

80AR＝そうなんですよこれ、そこだけなんか物語が関係ないだからなんか、（ ）私たちに言ってんのか：：なにこれみたいな＝

81IS＝私これ：：あの：：一番最初ある牛飼いが物語るなので：：一文字不明のところは牛？牛に呼びかけてて：：あの：：自分の：：牛が：：川にいっちゃいそうだったから、話が終わったタイミングでバツと顔をあげたら自分の牛が川にいて、るからお前川に入っちゃいけないよ、みたいな感じでその現実に戻ってきたことなのかなって解釈してました。

82ST あ：：＝

83IS＝でもここが一字不明なのが絶妙に（笑）笑わかりにくさを生んでるポイントだなんて思ってます。

84AR この話とはなんか内容が違う（ ）＝

85IS＝そう今までのこの話とちょっと違う：：ニュアンスの文章です＝

86AR＝なんか文脈的に意味が。

87IS 繋がってない。

88TD そうとるのが自然だと思うし、やっぱりあくまで牛飼いが物語ってるってことを／／最後にまた強調してきてるってことですね。

89IS／／う：：ん＝

90AR＝物語っぽく、作品全体をなんてゆうの物語らしくさせてるってゆうか＝

91IS＝あ：：そういう感じもしますね、なんか、空想、のお話っていうよりは：：なんか、ごめんなさい私、この効果につながっちゃうんですけど、その誰かが喋ってるってゆうことにすることによって教訓？とか、昔話のような感じだけどでも実際にあった話のように受け取りやすいんじゃないかな

●形式的な特徴の分析

発話の重なりやつながりが多く見られ、自由な雰囲気インフォーマルな会話である。

●会話上の機能の分析

75STがメンバーに意見を促す発話から会話がスタートしている。また、76ARが「一番最後の、これって意味わかりますか」と、最後の一文「おや、[一字不明]、川へはいつちやいけないつたら。」という「空所」を指摘し、話し合いを促進しようとする意図があることがわかる。また、100IS、102IS、104ISはSTの発言に対する質問であり、ISがSTの考えを理解しようとする意図が見られる。

●意味的な内容の分析

ARが問題提起した「おや、[一字不明]、川へはいつちやいけないつたら。」の意味について、85ISが「今までのこの話とちょっと違う：：ニュアンスの文章」として、直前までのオツベルと白象のストーリーとの乖離を指摘する。

とあって、で、教訓としてだったり、親しみ安さが生まれるからあの：：物語として：：よく受け取りやすいものになるんじゃないかなと思いました。

92ST 同じような考えです、この：：事件と語り手の間に時間的な厚みが生まれてるってことから、中の話、語ってる内容が、そこで完結した話／／結末までもう、そこから連想することなくこれは終わりですってゆうふうに、がちって区切ること、その：：ひとつの完結した話として捉えられる、それによって何がわかるかってゆうと今、Iさんが言ってくれたように教訓とか滑稽な話としても昔こんなことがあったんだよ、こんな悪い奴がいたんだよ：：みたいな。

93IS／／う：：ん。

94ST 語り手が、聞き手に対して教訓的に教える工夫がされてるように感じました。あとすいません、ここ最後の一文はちょっと捉え方が違って：：象が、川へ入っているのかわかってゆう／／ふうには自分は考えました。その白象がボロボロの白象が川へ入って、体力がないなかで川入ったら溺れて死んじゃうよ：：みたいな。

95IS／／あ：：。

96AR それに対して牛飼いが（ ）＝

97ST＝あ、そこの時間的な差が生まれるんですけど、最後こうして濁すことで、その：：象の生死をちょっと曖昧な感じにしてる、しながら：：その牛飼いや語り手の存在にだんだん戻ってくる＝

98IS＝そうすると今おっしゃってくれた象と。

99ST はい。

100IS この：：えっと物語の中に出てきた象が同一のぞうなん、だと、認識させるような仕掛けってことですか＝

101ST＝あ、えっと：：。

102IS 別物ですか。

103ST あれです、別です。

104IS 別なんです？

105ST 牛飼いが話してる、その：：時間軸には、象はいないです、川へ入っちゃったのは白象、って考えてました。

それに対して、86AR「文脈的に意味が」、88TD「そうとるのが自然」としてISの意見への同意を示している。また、88TD「物語ってる」という言葉を契機として、90AR「物語らしく」、91IS「誰かが喋ってる」という「語り」という構造への視点が生まれた。さらに、この物語における「語り手」の意義について、91IS「教訓?とか、昔話のような感じだけどでも実際にあった話のように受け取りやすい」、92ST「教訓とか滑稽な話」と解釈している。作品の構造や作者の意図についての発話へと進んだことから、ISとSTにメタ認知的な読みが発生したと考えられる。

【Bグループの発話】（※問い②の交流の後半から問い③へ進んだ）

- (中略)
- 128KT=いや多分労働者、諸君と、それをこ：：う、支える経済とかなんかこう大正の=
- 129IN=へ：：。
- 130IT そういう（ ）
- 131KT どうだろう色々=
- 132IT=社会を風刺する=
- 133KT 社会をうん、／／色濃く出てる。
- 134IN／／へ：：。
- 135KT (3) はい、経済とかまあ自然とか、ね、都会と農村とかそういうありようとか、(笑)
- (中略)
- 149KT アンチテーゼみたいな (3) あの語り方もなんかあれじゃないですか上からってゆうか=
- 150IT=う：：ん=
- 151IN=あ！
- 152KT なんか評価しながら進んでるってゆうか。
- 153IT「大したものだ」って、最初に入るじゃないですか=
- 154KT=そう、オツベルがえらいというか=
- 155IT=これ、えらいのかな？=
- 156KT=「大したものだ」って=
- 157IT=俺なんか馬鹿にしてるんじゃないかなって。
- 158KT オツベルったら「大したものだ」でしょ？第二日曜は両方（ ）オツベル、象も「大したものだ」、「けれどもそんなに稼ぐのもやっぱり主人がえらいんだ」。
- 159IN ん：：。
- 160IT ん：：。
- 161KT 稼がせてるオツベルえらいみたいな、評価かなって。
- (中略)
- 169YM なんか皮肉って言ってませんでしたっけ、「大したものだ」=
- 170IT=う：：ん。
- 171IT なんか牛飼って、牛飼って同じ、まあ、象、象が来てるオツベルからしたら、同じ生き物を扱う人、じゃないですか。
- 172KT (3) やっぱりこう牛をね。
- 173IT うんうん。
- 174KT 扱うもの、上手っていうか、／／そうですね。
- 175IT ／／うんうんうん。
- 176KT 彼に物語らせるからこういうふうな／／こう書き方ってゆうか。
- 177IT ／／うんうん。
- 178KT 百姓どもですよ。
- 179IT う：：ん。
- 180YM (4) 牛飼も結構百姓に、立場的には近いんじゃないかな=
- 181KT=まあそうですね=
- 182YM=思っちゃう、オツベルよりは下なんじゃないか=
- 183KT=でここら辺でもう言っちゃってるもん、売り飛ばせ、なんかね1ページ※とか。
- 184IT (2) 結局オツベルはそういう関わりしか象に対して、百姓に対しても、／／できてないんですよね。
- 185KT ／／最初からそうそう。
- ※ここから問い③の交流
- 186KT お願いしま：：す。
- 187IT お願いします。
- 188KT さっきちょっと出てきたんですよ=
- 189IT=うんうん=
- 190KT=うしをね、生業とする、牛飼とか、オツベルが人使ってとか、経済としての牛とか経済としての人とかだったり共通項がこう上からの評価ってか。
- 191IT う：：ん。
- 192KT 百姓どもとか、象どもとか。
- 193IT う：：ん。
- 194KT なんで象はってゆうとこあたり、とかいっぱい評価が出てはくる、しかもいっぱい上から？
- 195IT うん。
- 196KT な感じ？なそういう効果があるのかなあとと思ったんですけど。
- 197IT 私結構似てて、共通するポイントがいくつかあって、やっぱ命を扱う牛飼いがうし、オツベルが百姓、で仲間と白象、そして白象とオツベルなんかこう (2) 牛飼いとしてこう語っていることで、そのなんか上からってゆうのも出ましたけど、その浅い関係性が生み出したこの悲劇を、ただの物語ではなくちょっとこう俯瞰して馬鹿にしているような、そういうだからなんか、僕は「大したものだ」を「大したものだ」と捉えてなくて、そ：は！みたいなちょっと鼻で笑ってるような印象になったので、そういう意味をあえて持たせてるんじゃないかな、ってゆうまあ、そこは社会風刺につながるこの時代の社会風刺につながる、労働者とまあ資本家みたいな、そういう社会風刺にも繋がってるんじゃないかなって思い、はい以上です、ようやく読めました、最後 (笑)
- 198IN よかったです。
- (中略)
- ※講義時に配布したプリントのページを指す

●形式的な特徴の分析

発話の重なりやつながりが多く見られ、自由な雰囲気があり、インフォーマルな会話である。

●会話上の機能の分析

154KTの発言に155ITが反対意見を述べたり、169YM「皮肉」と、157IT「馬鹿にしてる」を聞き返す発言をしたりするなど、メンバー間でお互いの意見を深く知ろうとする意思が感じられる。188KTが前の問い②の交流との繋がりを意識させる発言をして会話を促進しようとしている。

●意味的な内容の分析

語り手である「牛飼い」が「オツベル」をどう見ているかについて、「オツベルときたら大したもんだ」を根拠として、KTは161KT「稼がせてるオツベルえらいみたいな、評価」としている。一方ITは、157IT「俺なんか馬鹿にしてるんじゃないかな」と述べ、複数の解釈が提示された。その後、ITは牛飼いとオツベルの共通点として、171IT「同じ生き物を扱う人」という観点を提示した。さらにその後、YMが180YM「牛飼いも結構百姓に、立場的には近い」として物語が書かれた時代の社会背景との関連から、語り手である「牛飼い」とオツベルのもとで働く「百姓」との共通点を見出している。語り手の「オツベル」への寄り添いの程度の読み取りはKTは強、ITは弱、YMは中と三者三様となっている。しかし、この違いを本人たちが自覚している発話は見られないため、自分たちの読みをメタ的に認知するところまで進まなかったことがわかる。しかし、交流の最後に、197ITが「浅い関係性が生み出したこの悲劇を、ただの物語ではなくちょっと俯瞰して馬鹿にしている」とし、物語の構造や牛飼いが語ることの効果についての言及が見られる。「ようやく読めました、最後（笑）」とあることから、話し合いを通してITの中でメタ的認知が発生したと捉えられる。

4. 4 考察

「質的三層分析」において重視される、学習者同士の認知的な変容やメタ認知的な変容にかかる発話は問い①「オツベルが白象に『つらく』したのはなぜだと思いますか。」の交流では確認することができなかった。しかし、Aグループにおいては、仕事をさせるために反抗しないことを第一に考えて辛くしたという意見と殺す方向で利用するという意見があり、解釈の違いが生まれた。Bグループにおいても白象を継続的な労働力、経済としての動物として見るのか、最初から殺す方向なのかという解釈の揺れが見られた。問い①については2つのグループにおいて、オツベルにとっての白象の意味や価値についての会話があり、オツベルの意図について多様な解釈が生じることがわかった。また、白象の命を危うくしようとも、利益を第一に追求していくオツベルの人物像を読むことは、問い②③につながる重要な要素となっている。Aグループでは、問い②について「ぎゅっとされてる」「裏切られて」、問い③について「悪い奴」という言葉が出されていることから、問い①で創られたオツベルの人物像をもとに会話をしていることがわかる。Bグループは問い③について「大したもんだ」の解釈をめぐって牛飼いがオツベルのことをどうみているのかという会話がなされているが、これもそれぞれの読み手が問い①で創ったオツベルの人物像が会話のベースとなっていると見ることができるだろう。

問い②「最後に白象はどうして『さびしくわらつ』たのだと思いますか。」では特定のメンバーにおいて白象の状況や心情を抽象的な言葉に置き換えて表現するメタ認知的な読み取りが発生した。問い③「『牛飼ひがものがたる』設定はどんな効果を生んでいますか。」について、Aグループでは牛飼いが語っている「現在」と牛飼いによって語られるオツベルと白象の存在する「現在」との時間の隔たりを根拠として2人のメンバーがこの物語に「教訓話」という定義を与えた。Bグループでは1人のメンバーは語り手である「牛飼い」に強く寄り添い、物語全体を一貫して説明するような読みを創り上げた。よって、問い③にもメタ認知的な読み取りが発生したといえる。

5 結論

「オツベルと象」において、問いを設定し読みの交流を行ったところ、読みの交流が成立した。白象、語り手である「牛飼ひ」に着目した問いにおいて、メタ認知的な読みが発生したことから、この作品を解釈する際は、白象の言動と牛飼ひの語りに着目することが良い。オツベルに関する物語内容駆動の問い①は要点駆動の読みに至る準備段階として機能した。白象との対比を通して読むとき、作品におけるオツベルの意味が立ち表れる。「オツベルと象」の教材化にあたっては、白象の「さびしさ」に着目した問いや、語り手である「牛飼ひ」の意図や存在の意味について考えさせる問いを設定することが、学習者の作品の本質に迫る読みにつながるかと考察する。

注

発話プロトコルの書式は、松本修（2015：17）に準じる。記述の方法、記号については以下の通りである。

- ・発話の単位は、間と内容（提題表現＋叙述表現）によって認定する。内容的に一連の発話は連続して記述する。
- ・発話には発話番号を付す。内容的形式的に一連の発話はひとまとまりとする。
- ・発話者はアルファベットで示す。
- ・漢字・平仮名・片仮名交じりで表記する。

記号

- // 発話の重なり。直後の//のあとの発話が重なっている。
- = 途切れのない発話のつながり。直後の=のあとの発話がつながっている。
- () 聞き取り不能。中に記述のある場合は、聞き取りが不完全で確定できない内容。
- (3) 3秒の沈黙。
- (.) 「、」で表記できないごく短い沈黙。
- : : 直前の音が伸びている。「:」がおおよそ0.5～1秒の長さを示す。
- 直前の音が不完全なまま途切れている。
- 、 発話中の短い間。プロソディー上の何らかの区切りの表示を伴う。
- ? 語尾の上昇。
- 。 陳述の区切り。語尾の下降などのプロソディー上の区切りの表示を伴う。
- 下線部の音の強調（音の大きさ）。
- °° 間の音が小さい。
- (笑) 笑い声ないし笑いながらの発話。
- (()) 注記。

引用文献

- (1) 本稿における「オツベルと象」の引用はすべて『宮沢賢治全集8』（ちくま文庫、1986年）に拠った。
- (2) ヴォルフガング・イーザー 饒田収 訳（2022）『岩波モダンクラシックス 行為としての読書 美的作用の理論』岩波書店
- (3) 西郷竹彦（1998）『西郷竹彦 文芸・教育全集17 文芸学講座Ⅳ 表現・文体・典型』恒文社
- (4) 田中実・須貝千里編（2012）『文学が教育にできること—「読むこと」の秘鑰—』教育出版株式会社
- (5) 中野登志美（2012）「宮沢賢治『オツベルと象』の教材性の検討—言葉の二重性という観点から—」広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 第61号
- (6) 小埜裕二（2011）『童話論 宮沢賢治 純化と浄化』蒼丘書林
- (7) 田中実・須貝千里（2001）『文学の力×教材の力 中学校編1年』教育出版株式会社
- (8) 山元隆春（1989）『『オツベルと象』における対話構造の検討—対話をひらく文学教育のための基礎論—』日本文学 38巻 7号
- (9) 松本修（2006）『文学の読みと交流のナラトロジー』東洋館出版社
- (10) 松本修・桃原千英子（2020）『中学校・高等学校国語科 その問いは、文学の授業をデザインする』明治図書
- (11) 松本修（2015）『読みの交流と言語活動 国語科学習デザインと実践』玉川大学出版部

Questions regarding “Otsuberu to Zou” Analyses of exchange of reading

Sayaka OSHIMA* · Takako SATO**

ABSTRACT

The creation of an original reading is one way for readers to enrich their literary interpretations. The story “Otsuberu to Zou” can be read in various ways by readers, as the work has “empty spaces.” In this study, we examine what questions are good for readers to interact with in terms of exchange of reading with “Otsuberu to Zou.” We also examine whether the questions approach the essence of the work. In this article, we conducted a reading exchange among graduate students and analyzed the results.

It was found that questions focusing on the loneliness of the white elephant and thinking about the intention and meaning of the cowherd as a storyteller were positively applied. In terms of such questions, the reading exchange could hold up and readers could approach the essence of the work.